慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソ連における「発達した社会主義社会の政治システム」論への一考察 (一)
Sub Title	The theory of "Political System of Developed Socialist Society" in the U.S.S.R.
Author	上野, 俊彦(Ueno, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1984
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.57, No.11 (1984. 11) ,p.41- 80
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19841128-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソ連における「発達した社会主義社会の政治システム」論への一考察（一）

上野俊彦

はじめに
第一章「「発達した社会主義社会」の概念
　第一節　理論的前提
　第二節　「発達した社会主義社会」の概念の導入
　第三節　「発達した社会主義社会」の概念の内容
第二章　ソ連における「政治システム」の概念
　第一節　ソ連における「政治システム」の概念の導入
　第二節　ソ連における「政治システム」の概念の内容……以上本号
第三章　「発達した社会主義社会の政治システム」の概念……以下次号
　第一節　ソ連邦憲法における政治システムの基本的枠組
　第二節　「発達した社会主義社会の政治システム」の概念をめぐる諸見解
むすび

はじめに

「発達した社会主義社会の政治システム」（политическая система развитого социалистического общества）という概念は、一九七七年に採択された現行のソ連邦憲法において確定され、体制認識の基本的な分析枠組としてソ連の社会科学者たちによって広く用いられている概念である。この概念の成立過程、その意味内容、ソ連の政治においてこの概念の出現がもつ意義を明らかにすることが本論文の主題である。

「発達した社会主義社会の政治システム」という概念は、「発達した社会主義社会」と「政治システム」という異なる成立の経緯をもつ二つの概念から成っている。「発達した社会主義社会」という概念は、一九六〇年代の後半からソ連および東欧諸国において用いられ始め、一九七一年には公式にソ連において採用された概念である。この概念は、ソ連の指導部内でのブレジネフ（Л.И. Брежнев）の隆盛とともにその重要性を増大させ、ソ連国内の文献において広く用いられるようになったものである。彼らによれば、この概念の起源はレーニン（В.И. Ленин）に求められるものであり、この概念の確立はマルクス・レーニン主義に対する創造的貢献であるという。他方、「政治システム」という概念は、一九六〇年代の後半以降、政治研究の分野において、西欧およびアメリカの政治学の一定の影響のもとでソ連の一部の研究者が用い始めたものであり、「発達した社会主義社会」の概念に比べてよりアカデミックな概念である。

本論文では、まず第一章で「発達した社会主義社会」の概念の成立過程、その意味内容を明らかにし、次いで第二章で「政治システム」の概念を扱い、最後に第三章において「発達した社会主義社会の政治システム」の概念について論ずる。

第一章「発達した社会主義社会」の概念

第一節　理論的前提

これまで一般に、マルクス・レーニン主義の理論では、資本主義社会以降の歴史の発展過程を、社会主義と共産主義という二つの段階に区分してきた。この区分は、マルクス（K. Marx）の一八七五年の著作「ドイツ労働者党綱領評注」（いわゆる『ゴータ綱領批判』）に由来する。この著作においてマルクスは、資本主義社会以降の歴史の発展過程を、(1)「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会の第一段階」、(2)「それ自身の基礎の上に発展した」「共産主義社会のより高度の段階」、という二つの段階に区分し、さらに、これら二つの段階を典型的に区別しているものは、前者が「労働量」に応じた分配が行なわれる社会であるのに対して、後者が「必要」に応じた分配が行なわれる社会であるという分配原則の違いである、と述べたのである。[1] レーニンは、一九一七年の著作『国家と革命』において、直接この「ドイツ労働者党綱領評注」を引用しつつ、マルクスのこの区分における「共産主義の第一段階」を社会主義に、そして「共産主義のより高度の段階」を共産主義に、それぞれ結びつけた。[2] そしてさらに一九一九年には、より明快に、「社会主義と共産主義との科学的な差異は、前者が資本主義の中から成長してくる新しい最初の段階を意味し、後者がそのより高度なさらに進んだ段階を示しているというだけのことである」と述べたのである。[3]

マルクスおよびレーニンによる一般論としての歴史の発展段階に関する議論は以上のものにつきるが、レーニンの場合には、ロシヤの社会主義の現実に対する数多くの具体的な言及があるのはもちろんである。それらの言及は、レーニンの起草した一九一九年のロシヤ共産党(ボ)綱領を含めて、総じて、社会主義建設の過程がきわめて長期にわた

ること、ロシヤは社会主義の最初の数歩を歩みつつあるにすぎないという後進的な状況であることを強調しているように思われる。たとえば、一九一八年三月のロシヤ共産党(ボ)第七回大会においてレーニンは、「われわれは資本主義から社会主義への移行の最初の段階以上には進んでいない」、「社会主義を築き上げるレンガはまだ造り出されていない」と述べており、[4] それから四年後の一九二二年三月のロシヤ共産党(ボ)第一一回大会に至っても、「現在われわれは社会主義経済の土台を建設する任務に直面している。これは成し遂げられたか。いや、成し遂げられてはいない。わが国にはまだ社会主義の土台はない」と主張しているのである。[5]

ロシヤの現実を直視したこのような慎重な見解をレーニンが提示してから十四年後、新しい社会体制を築き上げるには数十年を要するであろう、われわれの孫たちが社会主義建設をかろうじて体験できればよいのだが、というレーニンの予想をスターリン（И.В. Сталин）はくつがえした。すなわち、一九三六年一一月、新憲法草案をソ連邦ソヴェート第八回大会に提示するに際してスターリンは、「わがソヴェート社会は、すでに基本的に社会主義を実現し、社会主義体制を造り出すのに成功した」と宣言したのである。[6] そしてさらにスターリンは、次のような説明を加えた。「社会主義的生産様式が、今やわが工業の絶対的に優位な体制である」。旧搾取階級は、消滅し「一掃」された。今日、存在するのは、「労働者階級、農民階級、インテリゲンチャ」、すなわち「人類史上、いまだかつて存在したことのない」まったく「新しい」社会集団である。それゆえ、これらの集団のあいだの、すなわち社会全体の中での、経済的・政治的な矛盾は「減少し消滅しつつある」。[7] このように社会主義の実現を宣言したスターリンは、一九三九年三月の全連邦共産党(ボ)第一八回大会では、共産主義へむけての「さらなる前進」を唱え、そのためには資本主義諸国に経済的に追いつき、さらにそれを追いこすことが必要であると主張し、また「一国社会主義」論の延長上において、「資本主義の包囲が解除されず、外からの戦争による襲撃の危険性がなくならない限り」、共産主義の時代においても「国家は保持される」と述べたのである。[8]

フルシチョフ期にはいって一九五九年一月のソ連邦共産党第二一回大会は、ソ連において「社会主義が完全に最終的に勝利した」ことを宣言したが、[9] フルシチョフ(Н.С. Хрущев)の見解は、一九六一年一〇月のソ連邦共産党第二二回大会で採択された新党綱領においてより明確に表現された。この党綱領は、一九三六年の社会主義の勝利の宣言をくりかえし、さらに一九五九年の社会主義の完全かつ最終的な勝利の宣言を確認するとともに、その結果、ソ連は「プロレタリアート独裁」の国家から「全人民の国家」に変わったと宣言し、ソ連の現段階を「共産主義の全面的建設期」と規定したのである。[10] そして、この綱領によれば、ソ連は一九七〇年までに国民ひとりあたりの生産力でアメリカを追いこし、一九八〇年までには「共産主義の物質的・技術的基盤」の建設を終わり、それに続く時期に共産主義社会の完全な建設が完了するとされた。[11]

フルシチョフが解任されたのちもこの綱領は存続することになったが、しかし、ブレジネフは、そのきわめて楽観的な予測を黙殺した。とはいえ、綱領の中で述べられたソ連社会の発展の展望を無視することは、一方で、共産主義へと向かうソ連社会の進歩およびそれを指導するソ連邦共産党の歴史的使命への疑念をひきおこすことになりかねない。かくしてブレジネフは、新しいイデオロギー的な方向づけを必要とすることになった。そうした役割を担うものとして、「発達した社会主義社会」の概念が登場するのである。

第二節　「発達した社会主義社会」の概念の導入

ソ連において、公刊文書の中で「発達した社会主義社会」という用語を最初に用いたのは、一九六六年一二月二一日付『プラウダ』紙上に発表されたブルラツキー(Ф.М. Бурлацкий)の論文「発達した社会主義社会の建設について」であるとされている。[12] ブルラツキーのこの論文によると、当時あいついで行なわれていた東欧諸国の共産党ないしは労働者党の大会において各国の指導者たちが「社会主義のさらなる発展」を論じ、そしてとくにブルガリア共産党の

指導者であるジフコフ（Тодор Живков）が「現在、ブルガリア人民共和国は、その社会・経済的および政治的な発展の新たな段階、すなわち発達した社会主義社会の建設の段階にある」と述べていたという。[13] もっとも、ジフコフのこの演説の行なわれた一九六六年一一月のブルガリア共産党第九回大会の模様を伝えている一一月一五日付『プラウダ』には、ブルラッキーの引用したジフコフの演説の該当箇所は省略されている。[14] しかしこの当時、「発達した社会主義社会」という用語がすでに使用されていたことは確実である。なぜならば、ほかならぬブレジネフ自身が一九六五年九月一四日にクレムリンで開かれたソ連・チェコスロヴァキア友好会議において「チェコスロヴァキア人民は、共産党の指導のもとに、発達した社会主義社会を首尾よく建設し、それに続く共産主義への移行のための確固たる前提をうちたてている」と述べているからである。[15]

こうした状況の中で、「発達した社会主義社会の建設、あるいは社会主義の全面的建設の段階への移行」の問題が当時の東欧諸国の各党大会で「広範に議論され」、「目標として採択された」[16] ことを契機に、ブルラッキーは、いくぶん包括的なかたちで発達した社会主義社会の意味内容を提示する必要があると考えてこの論文を発表したのであろう。ブルラッキーによると、東欧諸国が発達した社会主義社会において目ざしていることがらは、一般的に次のようなものであるという。すなわち、経済的領域では、「科学・技術革命の要請に合致し、かつ資本主義の生産性よりも高い生産性を保障するような経済システムの創出」、「国民経済全体の調和的発展、とりわけ農業生産を工業生産の水準にまで向上させること、それを基礎にして社会主義社会の発展という条件のもとでの勤労者の要求に合致する生活水準に達すること」であり、社会的領域では、「労働者階級の指導的役割と全人民の統一の強化、人間関係における集団主義の精神と同志的連帯および社会主義的道徳の確立」である。さらにまた、政治的領域では、「党による社会の科学的指導の原則の首尾一貫した適用」、「労働規律の自覚的な強化をともなう国家機構と社会主義的民主主義の発展」であり、イデオロギー的領域では、「勤労者の意識の中に、科学的な世界観とマルクス・レーニン主義を不断に確立

してゆくための条件を保障すること」、「勤労者の専門的な知識、教養、文化の水準の向上」である。[17]

このブルラツキーの論文は、あくまでも当時の東欧諸国において「発達した社会主義社会」の概念が論じられているという事実を伝えたものであって、少なくとも表面上はこの概念の是非を論じてはいない。まして、ソ連が発達した社会主義社会であるということを論じたものではない。先に引用したブレジネフによる発達した社会主義社会についての言及も、チェコスロヴァキアにおけるそれをとりあげたものであった。少なくともこの時期にはまだ、ソ連が発達した社会主義社会であるということを明言するという意味でのこの概念の導入はなされていなかったと言える。

しかし、翌一九六七年以降、注意ぶかく慎重ではあるが、ソ連における発達した社会主義社会の建設という文脈で、この概念の導入が始まったのである。すなわち、一九六七年一一月三日、ブレジネフは、「十月社会主義大革命五〇周年記念」の「祝賀会」における「社会主義の偉大な勝利の五〇年」と題する報告の中で、きわめて控えめなかたちではあるが、二カ所にわたって発達した社会主義社会について言及したのである。すなわち、ブレジネフは、過去五〇年のソ連の「社会主義建設」の過程をふりかえったあと、「本日、社会主義革命五〇周年を記念するにあたり、われわれは、満足と誇りをもってこれまでに歩んできた道の偉大な総括を行なうことができる」と述べ、すぐに続いて、「わが国に建設された発達した社会主義社会は、『各人はその能力に応じて働き、その労働に応じて受けとる』という原則が支配する社会である」と言明したのである。[18] さらにブレジネフは、ソ連社会の今後の目標を述べるに際し、「現在われわれは、新しい任務、すなわちその規模の点で新しいばかりでなくその性格の点でも新しい任務、に直面している。その眼目は、発達した社会主義社会が切り開いている可能性をできるだけ完全に利用することである。われわれは、われわれの社会的獲得物を、わが国が持っている巨大な生産力、科学と技術の成果、向上しつつあるソヴェート人民の文化と教育の水準を、最も有効に利用することを学ばなければならない」と主張したのである。[19]

確かにこの報告の中でブレジネフは、「発達した社会主義社会」という用語に対していかなる直接的な説明も与え

ていないし、それがソ連社会の発展における一区切りの「段階」であるとも述べていない。しかし、先に引用したブルラツキーの論文によって紹介されていた東欧諸国における場合と同様に、発達した社会主義社会が、巨大な生産力、科学と技術の成果、向上しつつある文化と教育の水準といったことがらと結びつけられて論じられていることに注意しておく必要がある。なぜならば、後にソ連において「発達した社会主義社会」の概念が明確に規定されるようになった場合のその中心的な内容の一つが、生産力の増大や科学・技術の発展といったことがらだったからである。

ブレジネフの次なる重要演説は、一九七〇年四月二一日に行なわれた「レーニン生誕一〇〇周年記念」の「祝賀会」における「レーニンの事業は生き続け勝利する」と題する報告であったが、そこで彼は再び、発達した社会主義社会について言及した。すなわちブレジネフは、レーニンをたたえ、ソ連のこれまでの足跡をふりかえったあと次のように述べたのである。「同志諸君、この意義ぶかい日にあたり、レーニンの追憶を前にして報告すべきことがある。世界の文明史の上で初めて社会主義が完全かつ最終的に勝利し、発達した社会主義社会が建設され、共産主義を首尾よく建設するための諸条件が造り出されたのである」。そしてそのあとすぐに続けてブレジネフは、「現在のソヴェート社会」の「強力な社会主義工業と発達した農業」、「あらゆる階級と社会集団、あらゆる民族と準民族、あらゆる世代の友好と協力」、「あらゆる国家的・社会的な業務の管理への勤労者の参加を実際に保障する社会主義的民主主義」などについて言及した。そしてさらにブレジネフは、その少しあとで、「ソヴェート経済が新しい重要な段階にはいっている」こと、すなわち「社会主義的生産が巨大な発展を遂げ」「嵐のようなテンポで科学・技術革命が進展しつつある」ことを指摘したのである。(20)

ここでは、発達した社会主義社会が「社会主義的生産」の発展や「科学・技術革命」ばかりでなく、新たに、社会的な変化や「社会主義的民主主義」といったことがらにも結びつけられて論じられたことが注目に値するが、さらにまた、間接的にではあれ、発達した社会主義社会が社会主義の発展過程における「新しい重要な段階」であると理解

されうるような示唆を行なっていることにも注意しておく必要がある。なぜならば、社会主義から共産主義へという歴史の発展過程にさらに細分化された複数の段階を持ち込むことになった「発達した社会主義社会」の概念の段階論的な性格が、すでにここで示されていると考えられるからである。

そうした段階論的な言及は、翌年のソ連邦共産党第二四回大会でのブレジネフの発言においてより明瞭なかたちで見られることになる。すなわち、一九七一年三月三〇日の第二四回党大会中央委員会報告においてブレジネフは、ソ連の「発展の各段階の主要な特徴を考慮しなければならない」、「現代の経済と三〇年代末の経済とを区別する重要な新しい要素を見ないわけにはいかない」と述べたあと、「国民経済、社会主義的な社会的諸関係、広範な人民大衆の文化と意識は、はるかに高い水準に達している。ソヴェート人の献身的な働きによって、一九一八年にレーニンが語った発達した社会主義社会が、建設された」と宣言したのである。[21] ここでもブレジネフは、直接的にではないが、発達した社会主義社会が社会主義の発展過程の一つの段階であることを示唆している。少なくとも三〇年代末の段階と現在の発達した社会主義社会の段階とを区別していることは、明らかであろう。そしてさらに、「発達した社会主義社会」の概念をレーニンを引き合いに出して根拠づけようとしている点に注目しておきたい。確かに、「発達した社会主義社会」という用語それ自体は、レーニンによって使用されている。しかし、それは、レーニンの膨大な量の発言や著作の中のほんの数カ所だけのことにすぎない。ソ連の多くのイデオローグが社会主義をさらに複数の段階に区分することの根拠をレーニンによる「発達した社会主義社会」という用語の使用に求めているにもかかわらず、実際には、レーニンにそうした段階論が存在していなかったことは明白である。つまりレーニンは、この用語の使用に際してはもっぱら、先進的な資本主義の遺産を受け継いだ「安定した土台」を持った、その意味で「発達した」社会主義に比較して、ロシヤの社会主義がきわめて「後進的な」社会主義であるという現実を率直に認識すべきことを主張しているのである。したがって、レーニンにおけるこの用語の意味内容と、ブレジネフによって導入されたこの概念の

意味内容とは、同一ではない。とはいえ、ソ連においてはマルクスやレーニンにその理論的根拠を求めることによってイデオロギーや政策を正統化しようとすることがまさに常踏手段であるということは、周知のとおりである。この場合もまた、その例外ではないのである。

かくして、党大会中央委員会報告という最も権威のある公式発言において党書記長ブレジネフが発達した社会主義社会について言及したことによって、この用語は、ソ連における公式の概念としての地位を与えられるべき基礎を確立したのであった。しかしながら、この用語が党書記長のたんなる気まぐれで用いられたのではないということを明示するためには、党の権威あるイデオローグによってこの用語が用いられ、書記長によるこの用語の使用が再確認され支持されねばならない。それは、ソ連邦共産党政治局員兼書記というブレジネフに次いで重要な地位にある党指導者のひとりであり、かつ党指導部におけるイデオロギー担当の最高権威者であったスースロフ（M.A. Суслов）によって、まずなされねばならなかった。かくして、第二四回党大会後にソ連邦共産党中央理論誌『コムニスト』に発表された論文「ソ連邦共産党は創造的マルクス主義の党である」においてスースロフは、次のように述べたのである。「成熟した社会主義は、経済的、社会・政治的および文化的な生活諸条件の全面的で調和的な発展を前提としている。この段階においては、社会は、国民経済の全面的な発展、科学と技術の最新の成果の生産への応用、にもとづいて創出された物質的・技術的基盤を持っている」。「発達した社会主義は、社会主義的所有の完全な優位、あらゆる搾取分子の根絶、社会・政治的および思想的な社会の統一の確立にもとづいて成立する成熟した社会的諸関係によって特徴づけられる。ここでは、労働の量と質に応じた分配という社会主義的原則が完全に確立されている。発達した社会主義社会は、それに相応する政治的上部構造、すなわち最も完全な民主主義を体現する全人民国家をもっている」[22]。ここでは、これまで見てきたブレジネフの発達した社会主義社会への言及に含まれていた内容が再び繰り返され確認されているが、さらに興味ぶかいことは、フルシチョフによって導入された「全人民国家」の概念が「発達した社会主義

社会」の概念と結びつけられ、全人民国家が発達した社会主義社会の「政治的上部構造」であると規定されたことである。こうした規定によって、「全人民国家」の概念は、その後も現在に至るまでその存在を維持することになったのである。そしてさらにスースロフは、一九七一年一二月二一日に行なわれた全連邦高等教育機関社会科学系課程主任会議において、「ソ連邦共産党第二四回大会がわが社会科学者たちにさし示した重要なことがらは、発達した社会主義社会の根本的な諸問題の理論的研究、共産主義へのその漸進的な発展の過程と手段の科学的基礎づけである」と指摘し、研究者による「発達した社会主義社会」の概念の理論的精緻化を促したのである。(23)

第三節　「発達した社会主義社会」の概念の内容

ソ連では、一九七一年のソ連邦共産党第二四回大会以降、宣伝的な文書から専門的・学術的な文献まで、「発達した社会主義社会」の概念を論じた数多くの文献が発表され、若干の論争も行なわれた。しかし、ここでは、この概念が何よりもまずブレジネフ期の産物であるということを考慮して、ブレジネフ自身が一九七七年の末に『平和と社会主義の諸問題』誌に発表した論文「共産主義への途上の歴史的道標」を中心としてこの概念の内容を検討することにしたい。このブレジネフの論文は、それほど長いものではないが、ブレジネフ自身が比較的まとまったかたちで「発達した社会主義社会」の概念を論じた数少ない文献の一つであり、重要な意義のある文献である。この節におけるブレジネフからの引用は、とくに断わらないかぎり、この論文からのものである。

1

ブレジネフは、この論文の中で、「発達した社会主義社会は、共産主義構成体の第一段階の範囲内で新しい体制が社会・経済的に成熟する合法則的な段階である」と述べている。(24) ここには、二つの重要な論点が含まれている。その第一は、発達した社会主義社会は共産主義構成体の第一段階（いわゆる社会主義の段階）をさらに複数の段階に区

分した場合のより高度の段階である、ということである。[25] すなわち、そのことは、資本主義社会以降の歴史の発展過程を社会主義と共産主義という二つの段階に区分するという古典的なマルクス・レーニン主義の発展段階論に新しい要素が付け加えられたことを意味する。そして、そのことはまた、本章第一節で見た、一九三六年における社会主義の基本的な実現の宣言、一九五五年における社会主義の完全かつ最終的な勝利の宣言、および一九六一年の党綱領におけるそれらの宣言の確認、というこれまでのソ連社会の歴史的発展の段階区分についての基本的なテーゼの延長線上において、それらのテーゼとの理論的な整合性を保ちつつ、「発達した社会主義社会」の概念が提示されたことを意味する。さらにブレジネフは、発達した社会主義社会において「共産主義への漸進的な移行が始まる」、あるいは「成熟した社会主義の完成にともなって、この社会の共産主義社会への漸進的な成長転化も進められる」、そしてさらには「発達した社会主義社会の段階は、資本主義から共産主義への途上での比較的長期にわたる時期をなす」と述べている。[26] これは、たんに社会主義の段階が長期的なものであるというだけでなく、社会主義の段階をさらに複数の段階に区分した場合の一小段階である発達した社会主義社会の段階もまた長期的なものであり、しかもその発展は漸進的なものであるということを意味している。こうした発達した社会主義社会の段階の長期性と漸進性の強調は、その結果として、共産主義社会の実現は遠い将来のことであるということを暗黙のうちに示すことになる。このことは、結局のところ、フルシチョフによって主張され、一九六一年の党綱領に導入された、急速な共産主義社会の建設という楽観的な展望を実質的に否定することにつながるのである。

その第二は、発達した社会主義社会は「合法則的な」段階であるということである。ブレジネフが、「社会主義を建設している諸国の特殊な諸条件がどのようなものであろうと、社会主義がそれ自身の基礎の上に完成されていく段階、すなわち成熟し発達した社会主義の段階は、資本主義から共産主義への途上での社会改造の不可欠な一環である」[27]と述べていることからもわかるとおり、発達した社会主義社会が「合法則的な」段階であるということは、この

段階がいかなる社会主義国も例外なく「共産主義への途上で」通り抜けなければならない「不可欠な」段階である、ということを意味している。したがって、そのことは、とりもなおさず、「発達した社会主義社会」の概念がソ連を盟主とする「社会主義共同体」の理論的支柱として考えられていることを意味しているのである。そして、そこにおいて想定されているのは、多様な社会主義の道ではなく、発達した社会主義社会をすでに建設し終えたソ連のあとにそれを建設しつつあるその他の社会主義共同体諸国が続くという、単一の社会主義の道なのである。

(二)

「発達した社会主義社会」の概念の内容は多面的で複雑なものであるが、それらの中心をなすのは、経済的な問題に関するものである。このことは、前節で見たように、この概念の導入に際してブレジネフが「巨大な生産力、科学と技術の成果」に言及し、「ソヴェート経済が新しい重要な段階にはいっている」という認識を出発点にしていたことにも示されていたが、その後も一貫してこの概念は、その指標の中心を経済的基準に置いてきたのである。ブレジネフは、「成熟した社会主義は、高度に発展した生産力、巨大で先進的な工業、集団主義の原則にもとづいた大規模で高度に機械化された農業に立脚しなければならない。ソヴェート経済は、現在そのようなものとなっている」と述べて、一九三六年当時の生産力の水準に比較して現在のソ連の生産力がはるかに高度の水準に達していることを強調している。[28] そしてさらにブレジネフは、「現在では、発達した社会主義の諸条件のもとで、国民経済の絶え間ない成長、科学・技術革命の成果と社会の社会主義的組織化の優位性との結合にもとづいて、人びとの多様な物質的および文化的な要求をより完全に充足する方向に経済をはっきりと転換させることが可能になった」と主張している。[29]

こうしたブレジネフの主張の主要な特徴は、第一に、経済成長の主要な推進力としての「科学・技術革命」の重要性の強調であり、第二に、こうした「科学・技術革命」と結びついた経済発展が国民生活の水準の向上という方向において目ざされている、あるいは目ざされるべきであるという論点である。これらのことは、「発達した社会主義社

会」の概念について言及する数多くの論者によって一様に指摘されている。

たとえば、フェドセーエフ（П.Н. Федосеев）は、一九七四年の論文「ソ連における発達した社会主義社会の建設――レーニン主義思想の勝利」において、「発達した社会主義の条件のもとでの生産諸関係の改善」を「科学・技術革命の成果の全面的な利用にもとづいた経済の内包的タイプの拡大再生産への移行のための諸条件の創出として定義することができる」と述べ、「科学・技術の進歩があらゆる経済生活の主導的な要素となった」と指摘している。[30] また、一九七六年の論文「発達した社会主義と共産主義建設の理論的諸問題」においてフェドセーエフは、「成熟した社会主義社会の物質的・技術的基盤」の「具体的現われ」として、「よりいっそう技術的に完成された労働手段の創出と蓄積」や「国民経済の発展の外延的方法から内包的方法への移行」をあげ、そうした物質的・技術的基盤の「根本的な特質」として、「人民の福祉の向上に関連する多様な課題の解決へむけての経済の徹底的な転換を行ないながら生産上および社会的な諸問題を全面的に解決することが可能になり不可欠になったこと」を指摘している。[31] さらに、一九八一年の論文「ソ連における社会・経済的発展の当面の諸問題」においては、「科学の直接的な生産力への転化は、科学と生産の発展を相互に補完しあい刺激しあうとともに、発達した社会主義社会における社会的および個人的な活動のあらゆる局面に影響を及ぼすものであり、社会進歩の主要な原動力の一つである」と指摘している。[32]

また、コワリョフ（A.M. Ковалев）とコシチェフ（А.П. Косичев）は、一九七六年の共同論文「科学的共産主義の主要な課題」において、「発達した社会主義の経済の最も重要な特徴は、人民大衆の物質的福祉と文化的水準の急速な上昇を保障する社会的生産の水準の達成、国民経済のあらゆる分野の発展の複合性と均衡および科学・技術革命の成果と社会主義経済システムの優位性とのますます有機的な結合である」と述べており、[33] 他方、メドヴェジェフ（В.А Медведев）は、一九七九年の論文「発達した社会主義のマルクス・レーニン主義的概念」において、「発達した社会主義の段階における人民の要求をより完全に充足させることは、経済成長の内包的要素にいっそう大きな役割を担わ

せることを必要とする」、「発達した社会主義の経済的基礎は、計画的および均衡的な社会的再生産により大きな力点が置かれることをも意味する」と述べている。[34]

これらの主張から、ブレジネフの言う経済の「転換」とは、もっぱら重工業部門における資本成長にのみ関心を集中させてきた第一次五ヵ年計画以来のソ連の経済政策の「転換」、すなわち、重工業優先から国民の福祉の向上を念頭に置いた消費財生産の相対的な比重の増大をもはかる「均衡」成長への「転換」、ならびに「外延的」(量的)成長から「内包的」(集約的、質的)成長への「転換」を意味しているということが理解できよう。消費、軍事、成長に対する資源の均衡配分をその内実とするいわゆる均衡成長は、当然のことながら、きわめてゆっくりとしたものとならざるをえない。そしてさらに、国民の生活水準の向上のための実質収入の改善と他方での軍事支出の増大は、投資のための財源を減らすことになる。こうした問題に対する解決策として、「科学・技術革命」いわゆる技術革新による経済発展の活性化が主張されているわけである。つまり、「内包的」成長の強調は、投下資本単位あたりの生産の拡大と労働生産性の向上のために「科学・技術革命の成果」を利用することを意味しているのである。

(三)

右に引用した議論は、いずれも発達した社会主義社会における経済的変化を強調するものであったが、他方、変化しないことが強調されていることがらもある。それは、分配の問題である。ブレジネフは、「労働に応じた分配の原則は、新しい体制の発展のこの段階〔発達した社会主義社会の段階——引用者〕においても、しかも長いあいだ、有効であり続けることは言うまでもない」と述べて、社会主義の段階の分配の原則であるとされる「労働に応じた分配」が発達した社会主義社会においても維持されることを強調している。[35] この問題についてフェドセーエフは、前掲の一九七六年の論文の中で、発達した社会主義社会の段階においても「労働に応じた分配」の原則を「縮小することなく、できる限り実行することが必要である。この原則を無視し、これを消費財の均等配分によって置き換えようとする企

ては、もっぱら社会進歩の動因をそこない、社会の前進を妨げるだけである」と述べ、[36] さらに前掲の一九八一年の論文においても、この原則の「最も完全な実行」が「よりよい分配システムを創出することばかりでなく、生産の効率と質を改善することにおいてもまた重要な機能を果たし続ける」、「その重要性は、社会主義のより高度の成熟の段階への前進とともに高められることはあっても減ぜられることはない」と指摘している。[37] 他方、一九八一年二月二三日に行なわれたソ連邦共産党第二六回大会中央委員会報告においてブレジネフは、「社会主義のもとでの分配の主要な規準は、もっぱら労働の量と質だけである」と述べている。[38] これは、労働の量ばかりでなく質に応じた分配も行なわれるということを主張している点でたいへん興味ぶかい。「労働の量と質に応じた分配」という主張は、前節でとりあげたスースロフの一九七一年の論文の引用部分にも見られるように、現在のソ連ではごく一般的なものであるが、少なくともマルクスには、労働の「質」に応じた分配という考え方は存在していなかったように思われる。

これらの主張、すなわち「労働に応じた分配」の原則は発達した社会主義社会において最も完全に実現され、今後も長く維持される、そしてとくに労働の「質」に応じた分配も行なわれるという主張は、分配の平等よりも分配の格差をつけること、すなわち物質的刺激による生産性向上を目ざすことを優先するという現在の政策を正当化する意味をもつものと考えられる。

(四)

発達した社会主義社会における経済的変化は、必然的に社会構造の変化をともなう。ブレジネフは、ソ連社会に起こっている「深刻な変化」として、「この社会の主導的な勢力」である労働者階級の量的な増大、彼らの「社会的積極性と政治的成熟」ならびに「国家管理への参加」の不断の増大、彼らの教育水準の向上を指摘し、さらに「発達した社会主義の諸条件のもとで、科学・技術革命の影響を受けて、その活動において肉体労働と精神労働とをますます調和させながら結合している新しいタイプの生産者が成長している」ことを述べている。[39] ブレジネフはまた、コルホ

ーズ農民についても、「社会的地位に関してコルホーズ農民はますます労働者階級に接近しており、その教育水準と生活様式は現在すでに都市住民のそれとあまり違いがなくなっている」ことを指摘している。[40] そしてさらにブレジネフは、「労働者階級とコルホーズ農民との同盟」が「人民インテリゲンチャとの強固な政治的および思想的な統一へとさらに発展した」こと、およびそうした「歴史的に新しい社会的および多民族的な共同体の形成」がソ連における「発達した社会主義の重要な特徴」、「ソヴェート社会の等質性を示す指標」であることを指摘している。[41]

こうした、発達した社会主義社会における諸階級および諸階層、すなわち労働者、農民、インテリゲンチャのあいだの、肉体労働と精神労働とのあいだの、都市と農村とのあいだの差異の解消、ソ連邦内のそれぞれの民族および準民族の接近は、多くの論者の指摘するところである。[42] しかし、こうした社会構造の変化はきわめてゆっくりとしたテンポで進行するものであり、階級的な差異の解消は長期的な課題であると指摘されてもいる。また、フェドセーエフの前掲の一九八一年の論文においては、「完全な共産主義へと至る社会主義社会の建設と発展の全過程を通じて民族的な差異は解消されないであろう」とさえ論じられている。[43] こうした主張と、ソ連の「社会的等質性」を示す「新しい歴史的共同体」としての「ソヴェート人民」の形成という主張とは、一見したところ相いれないように思われる。しかしながら、この「社会的等質性」は、諸階級、諸階層および諸民族のあいだの差異の実質的な解消よりも、むしろ「政治的および思想的な統一」ならびに同一の価値観の共有に力点を置くものとして論じられており、その意味で、差異の解消が長期的な課題であると主張することと、「ソヴェート人民」の形成に象徴される「社会的等質性」の強調とは矛盾しないのである。発達した社会主義社会は、経済的には高度に工業化された社会として、そして社会的には強く統合された社会、換言すれば、同一の価値観と明確なコンセンサスを有した社会として定義されているのである。

(五)

発達した社会主義社会の政治的な特徴の最も主要なものは、この社会における「プロレタリアート独裁国家の全人

民的社会主義国家への成長転化」である。[44] この「全人民国家」の概念は、言うまでもなくフルシチョフによって導入されたものであった。フルシチョフにおいては、周知のように、ソ連社会の工業化、富の増大、人民の合意にともなって国家の機能が社会団体へと漸次的に移譲されるという想定のもとに「全人民国家」の概念が提示されていた。しかしながら、「発達した社会主義社会」の概念においては、全人民国家がその機能を縮小させていくものであるとは必ずしも考えられていない。ブレジネフは、「共産主義的社会的自治へむけてのソヴェート民主主義の完成とわが国家機構の発展にとって必要なことのすべてをわれわれは行なっている」と述べている。[45] 発達した社会主義社会においては、国家の機能は縮小されるどころか「発展」するのである。

かつてフルシチョフ期において、全人民国家は、(イ)搾取階級すなわち敵対階級がもはや存在せず、労働者階級の指導のもとですべての住民が統治し、すべての住民の意志と利益が代表されること、(ロ)資本主義の一掃、社会主義の建設、敵対階級の抑圧の任務が終了し、共産主義の物質的・技術的基盤の創出が主要な任務となり、社会団体への行政の移譲が進められること、(ハ)社会的自治が重視され、統治の民主主義的方法が拡大されること、これらのことによってプロレタリアート独裁国家と異なると考えられた。[46]

しかし、「発達した社会主義社会」の概念においては、プロレタリアート独裁国家と全人民国家のあいだの「差異」とともに、それらのあいだの「継承性」と「類似性」もまた強調されるのである。すなわち、ソロヴィヨフ（O.M. Соловьев）とスミルノフ（Б.В. Смирнов）の一九八二年の共同論文「発達した社会主義の社会の政治システムの構造」によれば、発達した社会主義社会の国家は、(イ)「社会・階級的構造の根本的な転換の結果、国内の階級闘争の道具すなわち階級的弾圧の道具ではなくなった」こと、(ロ)「広範な社会的基礎をもっている」こと、(ハ)「経済の発展を管理する主要な主体としての社会主義国家の役割」が「増大した」こと、(ニ)「より広範な民主主義、すなわち民主主義的中央集権制の原則の首尾一貫した実現にもとづく国家活動の全面的な改善」と「最も重要な国家的課題の解決への動

労者の直接的な利害関係的な参加」「にとくに関心を示す」こと、(ホ)「直接の目的が共産主義建設である」こと、これらのことによってプロレタリアート独裁国家と質的に異なるのであるが、また他方で、発達した社会主義社会の国家は、(イ)「プロレタリアート独裁の任務を継続しつつ、根本的に階級的な性格を維持している」こと、(ロ)「社会における権力行使の基本的な道具であり続ける」こと、(ハ)「プロレタリア国家に固有のものであった単一の政治的基礎」としての「ソヴェートが維持されている」こと、(ニ)「国際的な規模での帝国主義に対する階級闘争の道具であり、国際労働運動および国際共産主義運動との、すなわち現代のあらゆる民主主義的、反帝国主義勢力との、ソヴェート人民のプロレタリア的連帯の実現の手段である」こと、(ホ)「共産党が」「指導的勢力である」こと、これらのことによってプロレタリアート独裁国家と類似しているという。[47]

こうした見解は、ブレジネフ期の初期に「『全人民国家』概念を、可能なかぎり『プロレタリアート独裁』と同一性あるものとして説明しようとする試み」[48]が性急に行なわれたのとは対照的に、フルシチョフの「全人民国家」の概念を部分的にそのまま残しているように思われる。しかし、そこには、フルシチョフの概念との決定的な違いが存在するのである。すなわちそれは、共産主義の物質的・技術的基盤を創出する主要な道具ないし手段としての全人民国家が、より高度の生産を維持し発展させていくために必要な中央の計画や管理機構の改善を進めていくことにおいてますます重大な役割を果していく、と考えられていることである。たとえばコシツィン (А.П. Косицын) は、一九七三年の論文「発達した社会主義社会の国家」において、発達した社会主義社会の段階の国家は、「生産へのたんなる介入にとどまることなく、自ら国民経済を管理する単一の経済センターの機能をにな」い、「国民経済の計画化という複雑で多面的な機能を遂行することのできる唯一の組織」であると述べている。[49] 他方では、確かにフルシチョフ期と同様に、社会団体の役割の増大が主張されてもいる。[50] しかし、もはやそれは、国家の弱体化とともに論じられるのではない。ルキヤノフ (А.И. Лукьянов) が一九七六年の論文「発達した社会主義の政治システム」において述べている

ように、「社会団体の役割の増大をソヴェート国家の強化と対立させるならば、それは誤り」なのである。[51] そしてむしろ、社会団体の役割の増大は、シャフナザロフ（Г.Х. Шахназаров）が一九七八年の論文「社会主義の政治システムの発展の若干の傾向について」の中で述べているように、「あれこれの課題の解決において、労働組合およびその他の社会団体を国家機関との協力に引き入れる」という文脈で論じられるのである。[52]

なお、発達した社会主義社会における全人民国家と社会団体の役割については、第三章において、より詳細に議論されるであろう。

六

「発達した社会主義社会」の概念は、この社会の発展の漸進性と長期性、あるいは内部的なあつれきをともなわない穏やかな変化が強調されるかぎりにおいては、保守的な性格をもっている。しかし、この概念はまた、ソ連社会がその経済的な発展とともに政治的な変化を見せつつあることに対する一定の認識をも含んでおり、ブレジネフの次のような見解は、はからずも革新的な主張にその一定の基礎を与えていると言えよう。すなわち、「発達した社会主義社会は、発達した社会主義的民主主義の社会にもなっている。成熟した社会主義の段階においては、全人民国家の諸条件のもとで、国家生活の管理への勤労大衆のますます広範で積極的な参加がソヴェート社会の政治的発展の中心的な方向として強固に確立されている」。[53] その社会主義的民主主義は、「住民のさまざまな集団の多様な特殊的利益を社会全体の利益と結びつけ調和させながら、それぞれの特殊的利益の表出を保障しなければならない。この面で社会団体の役割は大きい」。[54]「要するに、社会主義的民主主義は、社会的利益のさらに増大する多様化に対する明確な対応を保障し、大衆のイニシアチヴと社会・政治的自主活動のための広範な自由を保障するものである」。[55]

こうした見解に従えば、勤労大衆の「参加」は、もはや国家的な目標のための「動員」の口実ではなく、共産党の指導という枠の中ではあるが、多様な利益を集約し表現する各種の社会団体をとおして勤労者が自らの意志と利益を

表明し実現させる手段であるということになる。

このように、現在のソ連においては、個人的、集団的および社会的な利益の多様性、あるいはまた、それらの対立と矛盾の可能性を論ずることは何ら例外的なことではない。たとえばザヴィヤロフ（Ю.С. Завьялов）は、すでに一九七〇年の論文「社会主義法における利益の表現」において、「労働のさらなる専門化、技術的な分化（細分化）、社会的諸関係の複雑化をもたらしている科学・技術革命の過程で、新しい数多くの集団的利益（たとえば各生産団体の利益）が生起している」と指摘していた。[56] またラザレフ（Б.М. Лазарев）も、一九七一年の論文「社会的利益と管理機関の権限」において、「多様な利益は、すでにそれら自身の中に、それらのあいだの対立を含んでいる。そして実際に、種々の経済部門のあいだでの利益の対立、それらの部門のそれぞれの利益と一般的利益との対立、全国家的な利益と地方的な利益との対立がしばしば観察される」と指摘し、[57] さらに「国家機関で働く者」や「管理機関の構成員に含まれる人びとは、あれこれの職務や権限のしかるべき遂行を促しもすれば妨げもする個人的および集団的な利益をもっている」と述べていた。[58] またシャフナザロフは、一九七四年の著作『社会主義社会における共産党の役割』において、すべての階級と社会集団の基本的利益が一致しているとしても「特殊的利益が一致しないことが起こりうるし、また現に起きている。それは、ある種の矛盾であり、敵対的なものではないが、いずれ解決されなければますます悪化することがありうる」と指摘していた。[59] さらにまたルキヤノフも、前掲の一九七六年の論文において、社会主義国家は「すべての勤労者の一般的な意志と利益を体現する」が、「しかしながら、社会主義のもとでの勤労者の根本的利益の一致も、住民のさまざまな社会階層や社会集団の特殊的利益の存在を決して排除するものではない」と述べ、さらに、「もちろん、社会主義国家の利益と労働組合を含めた社会団体の利益とは、結局は同一である。しかしながら、そのことは、生産、労働組織、勤労者への公共・生活サービスなどの具体的な諸問題に関して現に存在している不一致をとりつくろう必要がある、ということを決して意味するものではない。このような意見の相違は法則にかなっており、

場合によっては有益である。なぜならば、そのことが、状況を客観的に評価し、欠陥を明らかにし、それを克服する正しい方法を見い出し、原則的な批判と反批判をさかんにすることに役立つからである」と指摘していた。[60]

かくして、現在のソ連では、社会主義のもとでは個人的、集団的および社会的な利益の深刻な矛盾と対立は存在しないという命題は、公然と批判されているのである。それゆえ、一九八三年四月のモスクワの非公開セミナーで発表されたという『ソ連経済秘密報告』における、諸個人および諸社会集団の利益の対立の問題を抜きにした経済改革はありえないという主張[61]も、この報告の存在それ自体が今のところソ連当局によって確認されていないとはいえ、何ら突飛なものではないのである。

(1) Marx, K. *Randglossen zum Programm der Deutschen Arbeiterpartei.* — Marx/Engels Werke Bd. 19, Dietz Verlarg, SS. 20-21.

(2) Ленин В.И. Государство и революция. — Полное собрание сочинений, 5изд., т. 33, с. 92, 94, 98.

(3) Ленин В.И. Великий почин (О героизме рабочих в тылу. По поводу 《Коммунистических субботников》). — Полн. соб. соч., т. 39, с. 14.

(4) Ленин В.И. Седьмой экстренный съезд РКП(б) 6-8 марта 1918г. — Полн. соб. соч., т. 36, с. 49, 66

(5) Ленин В.И. XI Съезд РКП(б), 27 марта-2 апреля 1922г. — Полн. соб. соч., т. 45, с. 109.

(6) Сталин И.В. О проекте конституции союза ССР, Доклад на Чрезвычайном VIII Всесоюзном съезде Советов. 25 ноября 1936г. — Сочинения, т. 1 [XIV], Ed. by R.H. McNeal, Stanford, Hoover Institution, 1967, с. 149.

(7) Там же, с. 142-146.

(8) Отчетный доклад на XVIII съезд партии о работе ЦК ВКП(б), 10 марта 1939г., там же, с. 387-395.

(9) Резолюция XXI съезда КПСС по докладу товарища Н.С. Хрущева 《О контрольных цифрах развития народного хозяйства СССР на 1959-1965 годы》. — Внеочередной XXI съезд КПСС. Стенографический отчет, т. II, М., 1959. с. 443.

(10) Програма КПСС. — XXII съезд КПСС. Стенографический отчет, т. III, М., 1962, с. 303.

(11) Там же, с. 276.

(12) See, Hough, J.F. "Political participation in the Soviet Union," *Soviet Studies*, vol. XXVIII, No. 1, Jan. 1976, pp. 6-7.

(13) Бурлацкий Ф. О строительстве развитого социалистического общества. — Правда, 1966, 21 декабря.

(14) См.: Единство и сплоченность. Открылся IX съезд Болгарской коммунистической партии. — Правда, 1966, 15 ноября.

(15) Брежнев Л.И. Ленинским курсом. Речи и статьи, т. 1, М., 1973, с. 187.

(16) Бурлацкий, указ.

(17) Там же.

(18) Брежнев, указ., т. 2, 1973, с. 92.

(19) Там же, с. 100.

(20) Там же, с. 568, 571.

(21) Брежнев Л.И. Отчетный доклад ЦК КПСС XXIV съезду КПСС. Стенографический отчет, т. I, М., 1971, с. 62.

(22) Суслов М. КПСС — партия творческого марксизма. — Коммунист, 1971, No. 14, с. 19.

(23) Суслов М. Общественные науки — боевое оружие партии в строительстве коммунизма. — коммунист, 1972, No. 1, с. 19.

(24) Брежнев Л.И. Исторический рубеж на пути к коммунизму. — Избранные произведения, т. III, М., 1981, с. 264.

(25) 「共産主義構成体の第1段階」「社会主義の段階」という場合の「段階」のロシヤ語は фаза であり、それをさらに複数の段階に区分した場合の「段階」のロシヤ語は этап, стадия, ступень, период であり、これらは正確に使い分けられているようである。このことは、фаза が этап, стадия, ступень, период よりも長期的な段階を示すということを意味している。こうした用語の使い分けは、レーニンの『国家と革命』などには見られなかったものである。

(26) Брежнев, Исторический....., указ., с. 264, 268.

(27) Там же, с. 268.

(28) Там же, с. 265.

(29) Там же, с. 266.

(30) Федосеев П. Построение развитого социалистического общества в СССР — торжество идей ленинизма. — Коммунист, 1974, No. 2, с. 26-27.

(31) Федосеев П. Теоретические проблемы развитого социализма и коммунистического строительства. — Коммунист, 1976, No. 15, с. 45.

(32) Fedoseyev, P. "Current problems of socio-economic development in the USSR," *Social Sciences* (Moscow), 1981, No. 1, p. 33.

(33) Ковалев А., Косичев А. Магистральная тема научного коммунизма. — Коммунист, 1976, No. 8, с.18.

(34) Medvedev, V. "The Marxist-Leninist concept of developed socialism," *Social Sciences* (Moscow), 1979, No. 4, p. 16.

(35) Брежнев, Исторический....., указ., с. 268.

(36) Федосеев, Теоретические....., указ., с. 43.

(37) Fedoseyev, *op. cit.*, pp. 35-36.

(38) Отчет Центрального Комитета КПСС XXVI съезду КПСС и очередные задачи партии в области внутренней и внешней политики. Доклад Генерального секретаря ЦК КПСС товарища Л.И. Брежнева. — XXVI съезд КПСС. Стенографический отчет, т. I, М., 1981, с. 77.

(39) Брежнев, Исторический....., указ., с. 266-267.

(40) Там же, с. 267.

(41) Там же, с. 267-268.

(42) См.: Федосеев, Построение....., указ., с. 27; Ковалев и Косичев, указ., с. 17-19; Федосеев, Теоретические....., указ., с. 48-49; Бутенко А. Международное значение концепции развитого социализма. — Мировая экономика и международные отношения, 1977, No. 10, с. 17-19; Medvedev, *op. cit.*, p. 18; Fedoseyev, *op. cit.*, p. 34.

(43) Fedoseyev, *op. cit.*, p. 31.

(44) Брежнев, Исторический....., указ., с. 268.

(45) Там же, с. 276.

(46) См.: Бурлацкий Ф.М. О некоторых вопросах теории общенародного социалистического государства. —

Советское государство и право, 1962, No. 10, с. 5-6.

(47) Соловьев О.М., Смирнов Б.В. Структура политической системы общества развитого социализма. — В кн.: Политические отношения развитого социалистического общества. Межвузовский сборник. Л., 1982, с. 7-9.

(48) 木村汎「全人民国家論とその後」『共産主義と国際政治』第一巻第二号（一九七六年）、三六ページ。

(49) Косицын А. Государство развитого социалистического общества. — Коммунист. No. 6, с. 64. 同様の見解は、次の文献にも見られる。Федосеев, Построение....., указ., с. 25; Он же, Теоретические....., указ., с. 33.

(50) См.: Брежнев, Историчекий....., указ., с. 274.

(51) Лукьянов А. Политическая система развитого социализма.— Правда, 1976, 4 июня.

(52) Шахназаров Г.Х. О некоторых тенденциях развития политической системы социализма. — Советское государство и право. 1978, No. 1, с. 8.

(53) Брежнев, Исторический....., указ., с.269-270.

(54) Там же, с. 274.

(55) Там же, с. 274.

(56) Завьялов Ю.С. Выражение интересов в социалистическом праве — Советское государство и право. 1970. No. 6, с. 102.

(57) Лазарев Б.М. Социальные интересы и компетенция органов управления. — Советское государство и право, 1971, No. 10, с. 86.

(58) Там же, с. 93.

(59) Shakhnazarov, G. *The role of the communist party in socialist society* (Moscow: Novosti, 1974), p. 29. Cited by R.J Hill, *Soviet politics, political science and reform* (Oxford: Martin Robertson, 1980), p. 91

(60) Лукьянов, указ

(61) 「ソ連経済秘密報告。ソ連経済社会、活性化の条件」毎日新聞外信部訳『エコノミスト』第六一巻第三七号（一九八三年九月一三日）、一一三―一一六ページ参照。

第二章　ソ連における「政治システム」の概念

第一節　ソ連における「政治システム」の概念の導入

われわれが一般的に政治学と呼んでいる学問がソ連において始まったのは、一九六〇年代にはいってからであった。[62] それ以前は、政治それ自体、政治過程、政治行動などは研究対象となっていなかった。とりわけスターリン期には、国家の政策が絶対視され、政治を学術的な研究の対象とすることは不可能であった。そうした状況にあって一定の成果をあげていたのは、国家に関する研究であった。しかしそれは、法的・制度的および理論的・抽象的な研究であり、したがって国家は、現実の政治から切り離されて論じられていた。しかし、一九五七年のソ連邦共産党第二〇回大会におけるスターリン批判、一九六一年の新党綱領の採択をへて、従来の国家学を革新しようという気運がおこってきた。それは、一九六〇年におけるソ連科学アカデミーの改組による国家・法研究所の設立、および同年のソヴェート政治（国家）諸科学会の成立に象徴されるが、より具体的には、同年にソ連の一連の法学研究機関の研究テーマとして「共産主義の全面的建設の段階における社会の政治的組織の諸問題」がすえられたことにも明確に示されている。[63] 一九六一年の党綱領にも用いられている「社会の政治的組織」という概念は、社会全体の中での国家の位置づけを明確にするとともに、社会の政治的組織として国家ばかりでなく労働組合などの社会団体や共産党などの諸組織をその中に含めるという点で、ソ連の国家学の転換にとってきわめて重要な意味をもっていた。国家ばかりでなく社会団体や共産党をも含む社会の政治的組織を研究する学問は、もはや国家学と呼ぶにはふさわしくない。従来の国家学の枠をこえた研究領域をもつ新しい学問が台頭しつつあったのである。

当時のソ連の社会科学者たちは西欧およびアメリカの諸研究に強い関心をもち始めていたが、そうした状況の中で、たとえばシャバト (Б.А. Шабал) は、一九六〇年の論文「資本主義政治体制の擁護（ブルジョア社会学における『政治学』なるものについて）」において、全体としては「ブルジョア『政治学』」に対して批判的な立場をとりつつも、他方で、そこには「実証的・特殊的な諸問題に関する個別的には正しい諸命題と一般化が含まれている」と述べて、その実証性を肯定的に評価し[64]、「社会の政治的組織の本質的な諸問題の実証的研究に対して、あるいは社会・政治生活の事実と現象の理論的一般化に対して、努力を集中することがとりわけ重要である」と主張していた[65]。このように、「社会の政治的組織」という概念は、従来の国家学の研究領域の拡大ばかりでなく、「実証的研究」への関心の高まりとも結びついていたのであった。

そうした状況は、比喩的に言えば、ソ連の国家学における一種の「行動論革命」の始まりであった。たとえばチヒクワゼ (В.М. Чхиквадзе) は、一九六四年の論文「共産主義建設の現在の時期におけるソヴェート法学の諸問題」において、「国家と社会団体の相互関係、社会団体の活動の形態と方法」、「さまざまな社会生活の領域における国家の政策の計画化とその実現の最も有効な方法を研究することが重要である」と述べるとともに、「社会における市民の政治的行為の諸問題を研究しなければならない」と指摘していた[66]。さらに、一九六五年一月に『プラウダ』紙上に発表されたブルラツキーの論文「政治と科学」は、独立した学問分野としての「政治学」の承認と政治研究の科学化を要求して、この年のソ連の国家学者および法学者たちのあいだの白熱した論争をひきおこすことになったが、この論文においてブルラツキーは、政治学を「国家、政党、社会団体、大衆運動、国際的な連合体と組織の構造と活動に関連する諸問題、外交活動の形態と方法、世論、宣伝方法などの研究に従事する」ものとし、「政治学の視角」を「社会の指導のメカニズムを動態において研究すること、すなわち、このメカニズムがどのように機能しているかを研究すること」であると述べたのである[67]。

従来の国家学の研究領域の拡大の要請は、先に述べたように、国家およびそれ以外の諸組織を含む「社会の政治的組織」という概念の出現をもたらしたが、「市民の政治的行為」、組織と組織の「相互関係」をもその視野に収めた「動態」的な政治研究にとっては、この「社会の政治的組織」という概念でも不十分に思われた。かくしてブルラツキーは、一九六五年二月に行なわれたソヴェート政治（国家）諸科学会第四回年次総会において、「政治システム」という概念を用いたのであった。ブルラツキーは、前月に発表した論文「政治と科学」の主張を繰り返しながら、政治学の研究対象の一つとして、「社会主義諸国における政治システムの研究」をあげたのである。この政治システムの研究には、「(イ)国家、その役割と活動の方法。(ロ)政党、社会と国家におけるその役割、政党による社会と国家の指導の形態と方法。(ハ)政治的連合、すなわち政党連合、国民戦線など。(ニ)社会団体（労働組合、コムソモール、創作家同盟）とこれらの役割。(ホ)社会の科学的指導の方法、予測の原理と限界、政治的決定作成とその遂行の監督のメカニズム。(ヘ)指導的カードルの登用、選抜、交替。(ト)世論、その形成と政策への影響、プロパガンダの方法ならびにとりわけその有効性を高める手段」の研究が含まれるとされた。[68]

ここでブルラツキーが用いた「政治システム」の概念が、西欧およびアメリカで広く用いられている「政治システム」の概念とどの程度の関係があるか必ずしも明確ではない。「政治システム」という用語それ自体は、たとえば先述のシャバトの論文においても、「資本主義の政治システム」、「社会主義の政治システム」、「帝国主義の政治システム」といったかたちで用いられている。[69] しかし、シャバトの場合には、ブルラツキーのように、国家、政党、社会団体といった諸組織の相互連関によって成り立つものとしての、いわゆる「システム論」的な意味での「政治システム」が意識されていたわけではない。したがって、先にシャバトの論文を引用した際に筆者は、その論文の表題中の「政治システム」をあえて「政治体制」と訳しておいたのである。

ところで、今日的視点に立てば、「社会の政治的組織」の概念の出現よりも「政治システム」の概念の出現のほう

がより興味を引く問題であるが、少なくとも一九六五年初めの時点では、先述のように一九六一年の党綱領にも用いられ、法学研究機関の研究テーマとして設定されていたという意味で、公的承認を与えられた概念として「社会の政治的組織」の概念のほうが「政治システム」の概念よりも広く一般に支持されていたといえる。したがって、一九六五年二月に行なわれた先述のソヴェート政治(国家)諸科学会第四回年次総会においてチヒクワゼが、「社会の政治的組織を研究するすべての社会科学が広義の政治諸科学である」と言明し、[70] さらに数カ月後、アレクセイエフ (C.C. Алексеев) とチールキン (В.Е. Чиркин) が共同論文「社会の政治的組織、国家と法の諸問題を研究する学問の体系について」の中で、大学レヴェルの教育機関に、現在の法理論の課程とは別に、「社会の政治的組織の理論」の課程があるべきであると論じたのも、[71] そうした状況を反映していたといえる。

しかしながら、一九六五年一月から始まった政治学の独立をめぐる論争に一応の区切りを着けることになった同年六月一三日付『プラウダ』の編集局論文「政治諸科学の諸問題の研究について――読者の手紙を概観して――」は、「政治諸科学」という用語を用いることで暗に政治学の独立の主張を退けたものの、一方で「政治システム」という用語を用いてこの概念に一定の市民権を与えたのであった。この『プラウダ』論文は、約半年間にわたる議論を総括したあと、政治諸科学の研究対象の一つとして「社会主義諸国における政治システム、指導・組織、管理の諸問題の研究」をあげ、さらに次のように指摘したのである。「『国家学』という用語に関しては、『政治システム』という概念が『国家』という概念よりもずっと広いということを考慮する必要がある。そしてまさに〔従来の国家学の――引用者〕本質的な欠点は、たとえば国際関係は言うに及ばず、政党、労働組合およびその他の社会団体などといった政治システムの最も重要な構成部分が不十分にしか研究されていないということである」。[72] かくして『プラウダ』論文は、従来の国家学を批判しつつ、これまで十分に研究されてこなかった領域をもその視野に収めた「政治システム」の概念を支持したのである。

しかしながら、その後しばらくのあいだ「政治システム」の概念は、ソ連の研究者たちの関心を引かなかったよう

である。当時、研究者たちは、もっぱら、政治研究を対象とする学問の定義、その専門科学としての独立の是非、および主として統計的ないし数量的方法を用いた実証分析の技法の導入の問題などに主たる関心を向けていた。[73] 他方、「社会の政治的組織」の概念を用いた研究は、一定の成果を生んでいた。[74]

こうした状況において、西欧およびアメリカの政治学の動向に関する研究もいくつか発表されたが、[75] 政治システム論を含めたそれらの最初の包括的な研究は、一九六九年のカレンスキー（В.Г. Каленский）の著作『アメリカにおける政治学――権力のブルジョア的概念の批判』である。この中でカレンスキーは、「特別な関心を払う価値があるのは、最近、アメリカの政治学者のあいだで非常に広くゆきわたっているイーストン（David Easton）の『政治システム』の概念である」と述べて、イーストンの諸著作を引用しながらこの概念を紹介している。[76] ここでとくに興味ぶかいことは、イーストンの主張は「社会の政治的組織の普遍的で『動態的な』モデルをつくること」であったとカレンスキーが指摘していることである。[77] カレンスキーは、先述したように、当時のソ連において研究者たちのあいだで一般的に用いられていた「社会の政治的組織」という概念をイーストンのモデルすなわち「政治システム」の概念と結びつけることによって、イーストンの「政治システム」の概念の受容の可能性を示唆したのであった。とはいえ、カレンスキーは、イーストンの政治システム論を全面的に肯定したわけではない。すなわちカレンスキーは、次のように述べているのである。「イーストンとその支持者たちの考えによると、この概念の有用性、他の概念や政治的カテゴリーと比べてのその優位性は、次のことにあるという。すなわちそれは、この概念が、一方で、国家が特別の役割を果している現代の『発達した』社会の政治的組織の本質をきわめて正確に特徴づけており、他方で、国家のような専門化された強制の制度をもたない『未発達の』社会における構力構造の研究に適用しうるほどに広いということである」。しかし、そこには「方法論的な誤り」が存在する。なぜならば、「国家権力と、原始共同体のもとでの社会的権力との原理的な差異」、すなわち、国家権力などの「政治的権力は、支配と服従の関係を前提としている」が、他方、原

始共同体のような未発達の社会の「首領や長老の権力は、政治的秩序の権力ではなく、社会の全成員の支持にもとづく道徳的秩序の権力である」という「原理的な差異が、見失われている」からである。[78] このようにイーストンの政治システム論を批判したあと、カレンスキーは次のように述べてこの議論を締めくくった。「政治システムの『普遍的な』モデルの構築に際してイーストンが諸現象のあいだの大きな質的な差異を無視したことは、社会の研究に対するすぐれて機能主義的なアプローチが現実の真に科学的な認識を促すことができないということ、すなわち、あれこれの現象の重要であるがやはり相対的には副次的な側面を見ているために、その認識が現実をもっぱら歪曲したかたちで反映しているということを立証している」。[79] かくしてカレンスキーは、「政治システム」の概念を社会の政治的組織の動態的なモデルとして受容しうる可能性を提示しつつも、全体としてのイーストンの方法論には否定的な見解を主張したのであった。

第二節　ソ連における「政治システム」の概念の内容

カレンスキーに比べて「政治システム」の概念の導入に関してより積極的であったのは、ブルラツキーであった。先述のように、一九六五年に早くもこの概念に言及したブルラツキーは、一九七〇年の著作『レーニン、国家、政治』において、おそらくソ連で初めて本格的に「政治システム」の概念を用いて政治研究を展開したのである。ブルラツキーは、この著作の中で、「国家およびその他の政治制度の研究に対する本書のアプローチの独自性の一つは、政治構造のシステム分析という視点でその動態を究明しようという試みにある」と明快に述べたあと、かなり詳細に「政治システム」の概念を定義している。[80] その後この概念は、ブルラツキー自身によってさらに発展させられた。すなわち、一九七四年にブルラツキーは、ガルキン（А.А. Галкин）との共著『社会学、政治、国際関係』において、「政治システムと政治過程は」「政治研究の基本的対象である」と明言し、[81]「政治システム」の概念をより詳細に定義した

のである。[82] さらに、一九七八年にもブルラッキーは、自ら編集した論文集『現代の政治システム』において、前記著作をふまえてこの概念を詳述している。ソ連において一般に用いられるようになった「政治システム」の概念は、これらブルラッキーの著作を中心として確立され普及されたと考えられる。ブルラッキーのこれら三つの著作における「政治システム」の概念の定義は、もちろん、かなりの部分が重複しているが、若干の異同がないわけではない。それについては後ほど言及することにして、ここでは、差し当たりこれら三つの著作のうち最も新しい一九七八年の著作における定義をいくぶん詳細に見てみよう。それは、次のようなものである。

㈠政治システムの基本的特徴は、政治システムが、「政治権力によって中央集権的に管理される統一的な有機体としての社会の存在を保障する複合的な組織体である」ということである。

㈡社会の他のサブ・システム（たとえば、経済システムや文化システムなど）と比較しての「政治システムの特質」は、次のようなものである。(イ)「統括性。これは、政治システムが社会における最高権力を行使することを意味する」。(ロ)「政治システムの経済的、社会的、文化的な社会構造による被制約性。政治システムは、社会の最高権力を所有しているにもかかわらず、究極的には社会の経済的土台によって規定される上部構造である」。(ハ)「政治システムの相対的な自立性と高度の活発性。それは、権力のメカニズム、社会全体に資源を配分する能力と権限の存在によって規定される」。(ニ)「政治システムの基本的、実体的な特質としての管理。管理のプロセスには他のシステムも関与するが、政治システムにとってのみ、それは、その本質の表現となる」。

㈢「政治システムの基本的機能」は、次のようなものである。(イ)「社会の目標と課題の設定。何よりもまず支配的ないし指導的な階級の利益に一致する社会の活動計画の作成」。(ロ)「支配的ないし指導的な階級によって設定された目標の達成にむけての社会の資源の動員」。(ハ)「一般的な社会・政治的な目標および支配的なイデオロギーと文化の価値のもとへの社会のすべての構成要素の統合」。(ニ)「何よりもまず支配的かつ指導的な階級の利益に一致するよう

な、所与の所有と権力のシステムの維持のための、社会の価値の配分」。

(四)「政治システムの基本的構成要素」は、(イ)「政治構造あるいは政治的組織」、(ロ)「政治的・法的規範」、(ハ)「政治的諸関係」、(ニ)「政治意識および政治文化」である。[83]

「政治システム」の概念を以上のように定義したブルラツキーは、したがって、政治システムを「たんにそこに含まれる諸制度の総和として理解するのではなく」、[84]また政治を「国家、法、管理、民主主義、政治意識、政策などに分けて」考えたり、その研究において「諸制度の記述」に力点を置いたりするのではなく、まさに「政治システムのすべての構成要素の相互作用のプロセス」を研究することが重要であると指摘する。[85]そして、これまで「社会の政治的組織」の概念が、「ある場合には、もっぱら国家機関、政党、社会団体などの組織と制度だけを含み、また別の場合には、階級、集団、民族、労働集団、個人などの社会的集合体をも含む」という「あいまいさ」をもっていたのに対して、「政治システム」の概念は、そうした「社会の政治的組織」の概念による説明のもつ「諸困難の克服」を可能にするものであると述べている。[86]

しかしながら、そうした「政治システム」の概念も、ソ連の学界においては、現在なお依然として未完成のものと考えられている。完全な見解の一致がまだ存在しないのである。たとえば、一九八一年一二月のモスクワ大学法学部方法論セミナーにおいて、デニソフ (А.И. Денисов) らによって行なわれた「ソ連邦共産党第二六回大会と発達した社会主義の政治システムの方法論的諸問題」と題する共同報告は、「何よりもまず『政治システム』の概念それ自体を作り上げるためのアプローチの多様性、またとりわけその構成要素の定義に対する観点の多様性のゆえに、政治システムの種々の問題の分析のための概念装置のより深い研究の必要性が生じている」と指摘している。[87]またヤストレボフ (В.И. Ястребов) は、一九八二年の論文「ソヴェート政治システムの憲法的基礎」において、「この概念の内容についての議論は、多種多様である」ことを認めている。[88]さらにスミルノフ (В.В. Смирнов) も、やはり同年の論文「ソ

ヴェート社会の政治システム。研究の諸局面」において、「政治システム」の概念は、「現在のところまだ完成からはほど遠く」、「目標、システム内部の連関（関係）、周囲の環境との連関（関係）、機能、管理、機能遂行と発展、ヒエラルキー、構造（組織）」などの「概念、ならびに『要素』、『構成要素』、『自立性』などといった概念も同様に、政治システムの分析に際してきわめて矛盾したかたちで用いられている。多くの場合、研究者は、自分がその中にいかなる意味内容を込めているかを述べていない。用語上の統一がないにもかかわらず、それらが一般的な意味のある内容をもっているかのようにそれらを適用することは、政治システムに関する知識の蓄積を困難にしている」と述べている。[89]

実際、これらの指摘どおり、「政治システム」の概念の定義は、細部においては未確定であるように思われる。たとえば、ブルラッキーによるこの概念の定義も、先に引用した一九七八年の著作における定義と、一九七〇年および一九七四年の著作における定義とでは、若干の異同があり、この概念の定義がまだ確定したものでないことをうかがわせる。具体的には、ブルラッキーによる定義には次のような変化が見られる。まず、政治システムの基本的特徴については、一九七〇年の著作において、政治システムが「相対的に閉鎖的なシステム」であることが指摘されていたが、[90]一九七四年と一九七八年の著作にはそのような記述はない。このことは、一般に政治システムが「オープン・システム」と考えられていることからして当然の修正と言えよう。次いで、社会の他のサブ・システムと比較しての政治システムの特質については、一九七〇年の著作が「もっぱら政治システムだけが、全社会的な規模における国家的強制を独占し、そのための特殊な装置をもっている」ことのみを強調しているが、[91]一九七四年と一九七八年の著作は、ともに四つの特質をあげている。[92]とはいえ、先に引用したように一九七八年の著作が、その一番目の特質としての「統括性」をたんに「政治システムが社会における最高権力を行使することを意味する」ものとだけ述べているのに対して、一九七四年の著作は、それに加えて、政治システムの「決定が社会全体ならびにその各サブ・システムにとって強制的なものであることを意味する」とも述べており、[93]その点で、一九七〇年の著作における政治システムだけ

が強制装置を独占しているという指摘を継承している。また、四番目の特質として、一九七四年の著作は、一九七八年の著作と同様に「管理」の問題をあげているが、その記述は異なり、「その最高権力の存在と社会的資源の配分の能力によって規定される、社会の他のどんなサブ・システムの影響力よりも強力な、社会全体に対する政治システムの影響力」を強調している。[94] 要するに、当初は政治システムによる強制装置の独占やその強力な影響力が強調されていたのに対して、一九七八年の著作ではそうした指摘が見られなくなっているということが、顕著な変化である。そしてさらに、政治システムの基本的機能については、三つの著作ともほぼ同様の記述であるが、一九七四年の著作が四番目の基本的機能として、一九七八年の著作のように「社会の価値の配分」をあげるのではなく、「正統化、すなわち現実の政治生活を公的な政治的・法的規範に一致させること」をあげている点が異なっている。[95] 最後に、政治システムの基本的構成要素については、一九七〇年の著作が「構成要素」という概念それ自体を用いずに、たんに、政治システムは「国家、法、政党、政治的組織などの政治制度」と「社会の成員および社会集団を社会の中心である政治権力と結びつけるコミュニケーション・システム」を含むと述べていること、[96] および、一九七〇年と一九七四年の著作が基本的構成要素として「政治文化」を含めていないことが特徴的なことがらである。なお、一九八〇年のシャフナザロフとブルラツキーの共同論文「マルクス・レーニン主義政治学の発展について」は、政治システムの基本的構成要素を「一、政治構造（制度と機能）。二、政治的規範。三、政治的諸関係（原理と体制）。四、政治意識（文化と行為）」に分類しており、[97] 先のブルラツキーの一九七八年の著作における定義を部分的に修正している。

さらに別の研究者の著作を見てみると、きわめて多様な定義のなされていることがわかる。カレンスキーは、一九七七年の著作『社会学的分析の対象としての国家』において、前節で言及した一九六九年の著作と同様に、依然として「政治システム」を「社会の政治的組織」の同義語と見なしている。[98] また、スミルノフは、前掲の一九八二年の論文において、政治システムの基本的機能として、「目標の設定」、「目標の達成における優先順位の決定」、「資源の動

員と配分」、「種々のサブ・システムの利害の調整」、「変化する内外の諸条件への適応」、「安定の維持」をあげている。[99] さらに、政治システムの基本的構成要素として、ベロフ（Г.А. Белов）は、一九七六年の著作『社会主義型の政治的諸関係』において、「政治的諸関係」と「社会の政治的組織」を区別しているにすぎなかったが、[100] イリインスキー（И.П. Ильинский）とチェルノゴロフキン（Н.В. Черноголовкин）の一九七七年の共同論文「ソヴェート社会の政治システム。概念と構造」では、「政治制度」、「社会・政治的規範」、「コミュニケーション・システム」、「政治思潮および政治的意見（政治的イデオロギー）」が区別されている。[101] 一方、前掲のシャフナザロフとブルラツキーの一九八〇年の共同論文を基調報告とする「マルクス・レーニン主義政治諸科学の発展の諸問題」についてのディスカッションが一九八一年にソヴェート政治諸科学会の主催によって行なわれたが、そこにおいて、政治システムの基本的構成要素は、「一、政治構造と政治制度。二、政治意識と政治的イデオロギー。三、政治行動と社会集団、階級、大衆の運動」であるという見解や、あるいは、政治システムは、「制度的（組織）、調整的（規範）、機能的（体制）、イデオロギー的（意見）な構成要素」から成っているという見解などが主張されている。[102] さらに、コヴェシュニコフ（Е.М. Ковешников）は、一九八二年の著作『ソヴェート国家機構と民主主義の発展』において、基本的にはブルラツキーを支持しつつも、「政治意識と政治文化を政治システムの基本的構成要素の一つと見なすかどうかは未解決である」と述べている。[103]

このように、ソ連の研究者たちのあいだには、「政治システム」の概念の定義に関して、その細部での用語上の不統一や若干の異説の存在が見られる。その意味で、ソ連における政治システム論は、未完成であると言える。しかし、この概念のうちのおおむねの承認を得ている部分に限っても、ソ連における政治システム論の主要な特徴を理解することはできよう。少なくとも、ソ連において導入され、あるいは確立された「政治システム」の概念は、西欧およびアメリカの政治学において一般的に理解されているそれとまったく同一のものではない、ということは明らかであろう。そこには、ソ連における伝統的なマルクス・レーニン主義国家論との融合が見い出される。確かに、従来のマル

クス・レーニン主義国家論の大がかりな修正が行なわれたことは事実であろう。そこに、マルクス・レーニン主義の理論的な相対化ないしは比重の低下を見ることもできよう。しかし、ソ連における政治システム論は、いわばマルクス・レーニン主義化された政治システム論である。たとえばそれは、先述のブルラツキーの、政治システムを「社会の最高権力を所有しているにもかかわらず、究極的には社会の経済的土台によって規定される上部構造である」とする考え方に端的に示されている。もっとも、経済的土台と政治的上部構造との関係の問題は、マルクス・レーニン主義国家論に固有の複雑な論理をもっており、ここで深く立ち入るつもりはないが、現在のソ連の研究者たちの代表的な見解としてコヴェシュニコフの前掲書における次のような記述を引用しておこう。「経済的土台は、究極的には決定的要因であるが、政治的上部構造を吸収してしまうわけではない。政治的上部構造は、相対的に自立しており、それ自身に固有の法則性をもっている。一たび政治が一定のより複雑化された政治的現実を生み出せば、その発展は、経済の法則にまったく帰着することのないそれ自身に固有の法則に従う」[104]。

ところで、われわれにとってより興味ぶかいのは、これまでソ連の国家学においてあまり論じられてこなかった問題が「政治システム」の概念の導入とともに扱われるようになったということである。それは、政治システムの基本的構成要素の一つとしてあげられている「政治的諸関係」と「政治意識」の問題である。ブルラツキーは、前掲の一九七八年の著作の中で、このことについて次のように述べている。「政治的諸関係」と「政治意識」という構成要素は、「政治システムの機能遂行の過程における社会集団と諸個人の政治的諸関係と政治意識を特徴づける。これらの構成要素の分析は、その結果、政治生活のリアルな描写、政治機関その他の組織と政治的・法的規範の働きの実効性、そして管理する者とされる者とのあいだの、国家と社会とのあいだの、権力機構と個人とのあいだの相互連関を明らかにする」。「実証的・社会学的方法の適用にもとづいた世論研究、すなわち種々の階級および住民や諸個人の集団の政治的基盤と政治的観点、情報伝達の程度、価値態度、政治領域における行為の動機や動因、の社会心理学的な特徴

の研究は、すべて、あらゆる社会の政治システムの実際の機能遂行の描写を助ける」[105]。ブルラツキーのこのような見解は、ソ連邦共産党の指導部によって繰り返し主張されている世論研究の必要性の議論[106]に呼応するものと言えるが、従来の国家学の伝統的な枠組をこえる内容であることは明らかであろう。

以上、本章においては、ソ連におけるいわば一般論としての政治システム論を見てきた。次章においては、ソ連社会ないしは発達した社会主義社会の政治研究に「政治システム」の概念を具体的に適用することによって形成された「発達した社会主義社会の政治システム」の概念を検討する。

(62) 以下、本節において述べられているソ連における政治研究の発展についての詳細は、拙稿「ソ連における政治研究の発展」『慶應義塾大学大学院法学研究科論文集』第一六号（一九八二年）、九一―一一〇ページを参照されたい。

(63) Наука и коммунистическое строительство.—Советское государство и право, 1961, No. 7, с. 5-6.

(64) Шабад Б. Апология политической системы капитализма (о так называемой《политической науке》в буржуазной социологии). — Коммунист, 1960, No. 2, с. 89

(65) Там же, с. 97.

(66) Чхиквадзе В.М. Проблемы советской юридической науки в современный период коммунистического строительства — Советское государство и право, 1964, No. 9, с. 4.

(67) Бурлацкий Ф. Политика и наука. — Правда, 1965, 10 января.

(68) См.: Тадевосян Э.В. Дискуссия о политической науке. — Вопросы философии, 1965, No. 10, с. 164.

(69) Шабад, указ., с. 87, 90, 94, 97.

(70) См.: Тадевосян, указ., с. 165.

(71) Алексеев С.С., Чиркин В.Е. О системе наук, изучающих проблемы политической организации общества. государства и права. — Советское государство и право, 1965, No. 5, с. 49.

(72) О разработке проблем политических наук—обзор писем читателей. — Правда, 1965, 13 июня.

(73) 前掲拙稿九六―一〇〇ページ参照。

(74) たとえば、Политическая организация советского общества. М. 1967; Белых А.К. Политическая организация общества и социалистическое управление. Л., 1967; Волков М.С. Политическая организация общества. М., 1968; Денисов А.И. Социалистическая революция и политическая организация общества. М., 1971; Марченко М.Н. Политическая организация советского общества и ее буржуазные фальсификаторы. М., 1973 などがある。

(75) たとえば、Чиркин В.Е. О структуре политической науки в буржуазных странах. — Советское государство и право, 1968, No. 1; Шабад Б.А. О современных антикоммунистических теориях государтства (Критический анализ некоторых тенденций в политической идеологии империализма) — Советское государство и право, 1968. No. 8; Гулиев В.Е., Кузьмин Э.Л. О некоторых буржуазных теориях государственной власти. — Вестник Московского университета, Серия XII, Право, 1968, No. 22 などがある。

(76) Каленский В.Г. Политическая наука в США (Критика буржуазных концепции власти). М., 1969, с. 24. 邦訳、『現代のアメリカ政治学』稲子恒夫監訳、青木書店、一九七六年、二五ページ。

(77) Там же, с. 24. 邦訳、二五ページ。

(78) Там же, с. 24, 26-27. 邦訳、二五、二七—二八ページ。

(79) Там же, с. 27. 邦訳、二八ページ。

(80) Бурлацкий Ф.М. Ленин, государство, политика. М., 1970, с. 118-119.

(81) Бурлацкий Ф.М., Галкин А.А. Социология, политика, международные отношения. М., 1974, с. 21.

(82) См.: там же, Глава четвертая.

(83) Политические системы современности. М., 1978, с. 5-12.

(84) Бурлацкий и Галкин, указ., с. 20.

(85) Политические системы современности, указ., с. 5.

(86) Бурлацкий и Галкин, указ., с. 173, 175; Политические системы современности, указ., с. 7-8.

(87) Денисов А.И., Кененов А.А., Лубенченко К.Д., Марченко М.Н., Попков В.Д. XXVI съезд КПСС и методологические проблемы политической системы развитого социализма. — Вестник Московского университета, Серия 11, Право, 1982, No. 4, с. 5.

(88) Ястребов В.И. Конституционные основы советской политической системы. — Правоведение, 1982, No. 4, с 48.

(89) Смирнов В.В. Политическая система советского общества: аспекты исследования. — Советское государство и право, 1982, No. 3, с. 15.

(90) Бурлацкий, Ленин....., указ., с. 118.

(91) Там же., с. 119.

(92) См.: Бурлацкий и Галкин, указ., с. 175-176; Политические системы современности, указ., с. 9.

(93) Бурлацкий и Галкин, указ., с. 175.

(94) Там же, с. 176.

(95) Там же, с. 176.

(96) Бурлацкий, Ленин....., указ., с. 118.

(97) Шахназаров Г.Х., Бурлацкий Ф.М. О развитии марксистско-ленинской политической науки. — Вопросы философии, 1980, No. 12, с. 18.

(98) Каленский В.Г. Государство как объект социологического анализа. М., 1977, с. 162.

(99) Смирнов, указ., с. 17.

(100) Белов Г.А. Политические отношения социалистического типа. М., 1976, с. 161.

(101) Ильинский И.П., Черноголовкин Н.В. Политическая система советского общества: понятие и структура. — Советское государство и право, 1977, No. 1, с. 14.

(102) See Smirnov, V., "Horizons of Soviet political science," *Social Sciences* (Moscow), 1982, No. 3, p. 166.

(103) Ковешников Е.М. Совершенствование советской государственности и демократии. М., 1982, с. 101.

(104) Там же, с. 104.

(105) Политические системы современности, указ., с. 14.

(106) 尤山求笠' Отчет Центрального Комитета КПСС и очередные задачи партии в области внутренней и внешней политики. Доклад Генерального секретаря ЦК КПСС товарища Л.И. Брежнева. — XXV съезд КПСС. Стенографический отчет, т. I, М., 1976, с. 98; Отчет Центрального Комитета КПСС XXVI съезду....., указ., с. 97 参照°